

非デスマス形の機能による分類方法の検討 —情意的態度と聞き手目当て性の観点から—

An Investigation of Classification Methods According to the Function of Non-desu/masu Form of Japanese : From the Perspective of Affective Attitude and Addressing Level

岡 崎 渉*
OKAZAKI Wataru

デスマス形・非デスマス形は、文末に「です／ます」が付加されるかどうかという形式上の特徴により区別されるが、機能面から見た場合、非デスマス形は必ずしも一つのスタイルとは言えない。Cook (2002) は、非デスマス形にはインフォーマルスタイル (IF) とインパーソナルスタイル (IP) が混在することを指摘し、それぞれの典型的な特徴を挙げている。しかし、非デスマス形を話し手の「情意的態度」と「聞き手目当て性」という機能面から見たとき、独話的発話と呼ばれるタイプは IF・IP のいずれにも該当しない。そこで本研究では、非デスマス形を IF・IP・独話的発話に分類することは妥当なのか、また、この三タイプはどのような基準により分類できるのか、検討を行った。データには、デスマス形が主に使われる二者間の雑談 (11組, 約290分) と、非デスマス形が主に使われる二者間の雑談 (6組, 約160分) を用いた。その結果、タイプ間の中間的な発話は一部見られたものの、非デスマス形は IF・IP・独話的発話の三タイプに分類可能であることが認められた。また、主に「裸の非デスマス形」と、非デスマス形発話に用いられた「補助動詞」「文末詞」「文末の上昇音調」「疑問詞」の用法を分析することで、非デスマス形の三タイプへの分類基準を作成した。

キーワード：スタイルシフト、非デスマス形、インフォーマルスタイル、インパーソナルスタイル、独話的発話

Key words : style shift, non-desu/masu form, informal style, impersonal style, soliloquy

1. 非デスマス形に混在する異なるタイプ

1.1 一つのスタイルとしての非デスマス形

日本語には、デスマス形と非デスマス形という二つのスタイル¹があり、一般的に、相手との上下関係や親疎関係、場面等に応じて使い分けられるとされている (日本語記述文法研究会, 2009)。しかし、実際には目上の人や初対面の人とデスマス形で話すときでも、ときおり非デスマス形が用いられる。このスタイルシフトと呼ばれる現象については、従来多くの研究がなされており、その主な機能として、相手に対する親しさの表示や心理的距離の短縮、堅苦しい雰囲気緩和といった情意的機能が挙げられている (生田・井出, 1983; 三牧, 2000; 陳, 2003; 廣瀬・長谷川, 2010 等)。

とはいえ、シフトは自由になされるわけではなく、非デスマス形の中でも特定の特徴をもった発話が、特定の発話環境において用いられる傾向が見られる。例えば、終助詞の「ね」「よ」はほとんど用いられないこと (伊集院, 2004) や、情報要求とその応答を行う際には用いられないこと (Megumi, 2002) 等である。このことは、非デスマス形の発話には、何らかの点で異なるタイプが混在していることを示している。非デスマス形は

「普通体」「常体」「ダ体」とも呼ばれ、「です／ます」が用いられないことにより丁寧さの欠如を表す一つのスタイルとして扱われている。だが、同じ非デスマス形であっても、実際の運用では異なるものとして用いられている以上、どのような観点により区別できるのかを検討する必要がある。

1.2 インフォーマルスタイルとインパーソナルスタイル

Maynard (1991) は、雑談と小説、随筆をデータに、非デスマス形の特徴を分析した結果、非デスマス形は、強い意識を伴って聞き手／読み手に直接宛てられるものと、聞き手／読み手への意識が希薄であり、ほとんど話し手／書き手自身に宛てられるものに大別されるとした。

Maynard (1991) を踏まえた Cook (2002) は、小学校での授業やインタビュー会話、新聞記事等を分析し、非デスマス形にはインフォーマルスタイル (IF) とインパーソナルスタイル (IP) が混在することを指摘した。IF は、聞き手に対する話し手の態度や気分、対人関係といった情意的態度を表すものであり、例 (1) のような非デスマス形発話を指す。

* 兵庫教育大学大学院教科教育実践開発専攻言語系教育コース、グローバル教育センター 助教

平成29年10月12日受理

例(1)【Cook (2002: 151-152)】²

- 01 H: 何が一番おもしろかった？
 02 T: さっき話したよ。
 03 H: でれーとしてね、ぶんなぐっても怒んないの。

これは家族の会話であるが、三つの非デスマス形発話だけを見ても、両者が近い関係であることがうかがえる。IF は、このように聞き手に対する情意的態度が表示されることで、聞き手と親しい関係、心理的に近い関係であることが指標される。その典型的な特徴としては、終助詞や文末の上昇音調、母音の引き伸ばし、倒置（例「おいしい、これ。」）、音の縮約（例「読まない」→「読まねー」）といった affect key と呼ばれる要素の共起する点が挙げられている。

IP は、話し手の意識が、聞き手よりも発話の情報内容に向けられていることが指標される非デスマス形発話である。例(2)は、焼鳥屋でインタビューを行っているインタビュアーと来店客によるやりとりである。

例(2)【Cook (2002: 157)】

(I: インタビュアー, C2: 来店客)

- 01 I: あの、焼き鳥の魅力はどういうところですか？
 02 C2: あ、やっぱり安くておいしいんで、おいしいから。
 03→I: 安くておいしい。
 04 自分であの作っちゃおうなんて気は？
 05 C2: ありません。
 06→I: ない。

インタビュアーの質問（01, 04行目）に来店客が答えているが（02, 05行目）、インタビュアーはその応答を簡潔に言い換えている（03, 06行目）。この03, 06行目のような発話が IP に当たる。例の非デスマス形発話は、相手との親しさや心理的距離の短縮といった対人関係を表しているわけではなく、情報内容のみが提示されている。IP の形態的特徴としては主に、裸の非デスマス形が用いられる。

IF・IP は以上のように特徴づけられるが、では、非デスマス形発話はそれらの特徴だけで IF・IP に区別できるだろうか。終助詞等の affect key の有無が大きな目安になるが、affect key がいない場合であっても、必ずしも IP になるわけではない。岡崎（2017）は、デスマス形主体である初対面二者間の雑談をデータに用い、シフトされる非デスマス形発話の情意的態度がどのように表示されているのかを調べている。例(3)は、会話の収録を実施した大学に初めて立ち入った二人のやりとりである。F02は、この大学が思った以上に広く、建物も豪華であったことから、旅行にきたような気分であると興奮気味に話しており、F01もそれに同調している。

例(3)【岡崎（2017: 27）】

- 01 F02: 若干（んー）、プチ旅行[hhhh]。
 02→F01: プチ旅行。
 03 そう(hhhh)、そうさっきもその話して
 04 (hhh)，ちょっと旅行、(ねー)した気分で。
 05 F02: なんか、旅館の部屋から見えるー hhhh
 06 (hhh)。
 07→F01: 旅館の部屋。
 08 F02: そうですねー。

F01による02行目と07行目に affect key は共起しておらず、情報内容のみが提示されているので、IP のように思える。だが、これらは直前の相手発話の一部を繰り返したものであり、いずれも繰り返すを行うことで冗談という文脈が引き立てられ、また、F02への同調が示されている。このような場合の情意的態度を岡崎（2017）は、発話が特定の連鎖上の位置に置かれることにより生じるものであるとしている。非デスマス形発話を区別しようとしたとき、発話単体のみで判断することはできないことが窺える。

1.3 独話的発話

Cook（2002）は、非デスマス形に IF・IP が混在していることを指摘したが、あらゆる非デスマス形がこの二タイプに分類できるとしているわけではない。IF・IP のいずれにも該当しないと思われるのが「独話的発話」である。本稿での「独話的発話」とは、会話において他者に聞かれることを承知の上で発せられる「聞き手不在」（仁田, 1991）の発話である。例(4)に三牧（2000）から引用した独話的発話の例を挙げる。これは母語話者と非母語話者による雑談である。

例(4)【三牧（2000: 44）】³

- 01 NS ジャ、失礼ですけど、今、おいくつですか？
 02 NNS あ、22歳（//です）。
 03→NS //22歳。
 04 NNS そう。ふふ。
 05→NS {後方に大きくのけ反り、上を仰ぎながら}あれ、
若いなあ。何でやろ。
 06 NNS ふふふ。
 07→NS {後方に大きくのけ反ったまま} 22？

NS は01行目でデスマス形により質問しているが、03行目の「22歳」は、02行目の発話の一部をそのまま繰り返した非デスマス形であり、情報内容へ意識が向けられていることが指標される IP と解釈できる。一方、05, 07行目の発話は、聞き手に直接宛てられないという IP の特徴と、affect key である終助詞「な（なあ）」や文末の上昇音調といった IF の特徴をあわせもっており、IF・

IP のどちらにも該当しない。

Cook (2008a) では、IP の用法の中に独話的発話も含めてあるが、この点について詳述はなされておらず、また、取り上げられている IP の例は裸の非デスマス形に限られている。そのため、終助詞等の affect key が付加された場合は、Cook (2002) に従えば、終助詞と共に起していることが特徴の一つである IF ということになる。しかし、IF は目上の者や疎の関係の者に対しては通常用いることができない一方で、独話的発話は、三牧 (2000) でも示されているように、デスマス形主体の会話でも頻繁に用いられる。IF と独話的発話のこういった違いは、発話が聞き手に宛てられているかどうかの違いによるため、終助詞が付加されていても即座に IF と見なすことはできない。

以上のように独話的発話は、聞き手に直接宛てられず、かつ話し手の情意的態度が表示されるという点で、IF・IP のいずれとも異なる。非デスマス形発話には、少なくとも IF・IP・独話的発話の三タイプが混在していると言えるが、では、すべての非デスマス形発話が、この三タイプのいずれかに分類されるだろうか。また、分類可能ならどのような方法により分類できるだろうか。

2. 研究課題

本研究の課題は以下二点とする。

- 1) 非デスマス形の発話は、IF・IP・独話的発話に分類可能か。
- 2) 非デスマス形の発話は、どのような方法により IF・IP・独話的発話に分類できるか。

3. データ

用いるデータは、特定の制度的な文脈に依存しない会話である雑談が適している。制度的会話⁴の場合、非デスマス形発話の理解が制度的文脈に依存するため、雑談の方がよりさまざまなタイプの会話に一般化できる可能性をもつためである。

データにはデスマス形主体の会話（以下、デスマス形会話）と、非デスマス形主体の会話（以下、非デスマス形会話）を用いた。デスマス形会話を用いるのは、シフトされる非デスマス形には IF の使用が控えられであろうことから、IP・独話的発話の特徴を浮き彫りにするのに適していると考えたためである。非デスマス形の使用に制約がない非デスマス形会話と比較しつつ、IF・IP・独話的発話それぞれの特徴、及び分類基準を検討する。

用いたデータセットは、筆者が2011年に広島県の大学で採集した『初対面同学年の二者による雑談』に加え、他の研究者が2010年から2011年にかけて兵庫県の大学で採集した初対面二者間の雑談、そして『BTSJ による日本語話し言葉コーパス』（宇佐美, 2007a）所収の二者間

の雑談である。デスマス形会話はすべて初対面である11組（約290分）によるものであり、非デスマス形会話は友人間会話4組と初対面会話2組（約160分）によるものである。デスマス形会話のデータ概要を表1に示す。

協力を得た会話参加者は、男性が4名、女性が14名、計18名であった。内4名（M03, F01, F02, F04）は2度会話に参加している。正確な年齢は不詳な者もあるが、概ね年齢の近いペアであり、大学生、大学院生、社会人からなる。P-01～P-08が、他の研究者が採集したデータであり、P-09～P-11が筆者の採集したデータである。前者については、ディスカッションに参加してもらうという名目で来てもらった初対面となる参加者二名に、同じ筆者が採集した3組の会話は、大学内のカフェで収録したものである。協力者にはカフェに直接来てもらい、同じテーブルに座った初対面となる二名に、内容は何でも良いので50分間自由に話してもらうよう伝えた。P-11のデータについては、IC レコーダーのトラブルにより、会話開始から20分ほど経過した後の部分のみをデータに用いている。

表1 デスマス形会話のデータ概要

会話 No.	ペアの組み合わせ (M: 男/F: 女)		会話時間 (分)
P-01	F01 (社会人・27歳)	F02 (社会人・26歳)	22
P-02	F03 (博士1年・20代後半)	F04 (修士2年・20代後半)	19
P-03	F04	F07 (社会人・20代後半)	22
P-04	M01 (博士2年・30代後半)	F05 (修士1年・40代)	18
P-05	M02 (学部2年)	M03 (学部4年)	22
P-06	M03	F06 (学部1年)	22
P-07	M04 (学部4年)	F02	17
P-08	F01	F08 (学部4年)	18
P-09	F09 (学部4年)	F10 (学部4年)	49
P-10	F11 (学部4年)	F12 (学部4年)	50
P-11	F13 (学部4年)	F14 (学部4年)	33

表2 非デスマス形会話のデータ概要⁵

コーパス番号	会話コード	性別・関係	会話時間 (分)	音声データ
N-01 (59)	NF01-NF02 (BF02-F02雑談)	女-女友人	14	無
N-02 (63)	NF03-NF04 (BF03-F03雑談)	女-女友人	15	無
N-03 (77)	NM01-NM02 (BM04-M08雑談)	男-男友人	15	無
N-04 (80)	NM03-NF05 (BM05-F09雑談)	男-女友人	20	無
N-05	NF06-NF07	女-女初対面	48	有
N-06	NF08-NF09	女-女初対面	55	有

表2は非デスマス形会話のデータ概要である。会話参加者はすべて学生であり、友人間会話が4組、初対面会

話が2組であった。学内の個室やカフェで自由に話すよう求め、雑談を行ってもらったものである。初対面の2組については、デスマス形会話 P-09, P-10, P-11と同様の手続きで採集した。

分析には書き起こされた文字化資料を用い、適宜音声データも参照したが、非デスマス形会話で音声データを有しているペアは、初対面会話の2組のみであった。

4. 方法

4.1 スタイル及び非デスマス形の分類

4.1.1 発話文の認定

本研究では、スタイルを認定する単位を「発話文」とし、統語的単位である「文」を基に区分した。具体的な認定方法については、基本的に宇佐美（2007b）に従った。相違点として、宇佐美では相づち的な発話や笑いも、前後に間がある場合は発話文に含めているが、本研究では含めなかった。相づち的な発話とは、「あー／へー／え」といったフィラーや、「なるほど」「そう／うん／はい／いや／いえ」等の相づち、感嘆詞、応答詞等を指す。これらは三牧（2002）の言うように、質・量ともに他の実質的な発話と同等のものと見なすことはできないためである。しかし、「そう／うん／はい／いや／いえ」といったスタイル上の対立をもつ発話は、構文として疑問文であり、かつ情報要求として用いられている発話に対して、応答詞として単独で用いられた場合は、他の実質的な発話と同等のものと見なし、発話文として認定した。「そうね」「そっか」のように終助詞を伴った形の場合、非デスマス形であることが明示されるため、発話文として認定した。その他に、「はじめまして／すみません」といった定型的な挨拶も、スタイル上の対立をもたないものは発話文に含めなかった。

4.1.2 スタイルの分類

認定されたすべての発話文を、各発話文の文末形式により、「デスマス形」「非デスマス形」、あるいは「中途終了」のいずれかに分類した。スタイルは節末でも選択が可能だが、本研究で用いたデータに、節末でデスマス形が用いられることはほぼなかったため、本研究では発話末形式のみを研究対象とした。『BTSJによる日本語話し言葉コーパス』に所収のデータに対しても、上記の本研究における発話文の定義を適用した。

本研究における「デスマス形」は、発話末が「です／ます」、または、「です／ます」に終助詞、あるいは終助詞的に用いられた接続助詞が付加されている発話文である。終助詞的に用いられた接続助詞とは、「ので／から／けど／が／し」を指す。これらが付加された発話は、内容的には完結した発話と見なされ得るため（白川、2009）、主節に当たる発話が直前にあり、倒置されていると見なせる場合を除き、接続助詞に前接する発話末形

式によってデスマス形か非デスマス形に分類した。

「非デスマス形」は、発話末に「です／ます」が用いられておらず、動詞・形容詞・形容動詞の終止形、または名詞で終了している発話文、あるいはそれらに終助詞、または終助詞的に用いられた接続助詞が付加されている発話文とした。名詞で終了している発話文も含めたのは、形態的には「です／ます」を付加できる発話であり、非デスマス形の用言で終わられる発話同様の機能を果たしうると思われるためである。

「中途終了」は、自発的に言い切られなかった発話文である。具体的には、陳（2003）、伊集院（2004）等と同様に、述部が省略された場合や、従属節のみで主節が省略された場合、発話末の音調が上昇・下降しておらず平板に引き伸ばされた場合、言い淀んだ場合を指す。他にも、連用形の「て／で」⁶ や、「みたいな」「っていう」「とか」等で終わられる発話も見られたが、終助詞が付加された場合も含め、一律で中途終了発話とした。

4.1.3 非デスマス形の分類

続いて、非デスマス形の分類について述べる。Cook（2002）や三牧（2000）等を踏まえると、IF・IP・独話的発話の定義は以下の通りとなる。

インフォーマルスタイル（IF）：

聞き手に対して強く意識が向けられており、且つ、聞き手と親しい関係、心理的に近い関係であることが指標される非デスマス形発話

インパーソナルスタイル（IP）：

聞き手に対する意識が希薄であり、話し手の意識が発話の情報内容へ向けられていることが指標される非デスマス形発話

独話的発話：

聞き手不在であるかのように発話され、思考や心情が率直に表出されることにより、話者間の心理的距離を短縮させる非デスマス形発話

本研究では、これらの概念的な定義に基づいて、実際の会話で用いられるさまざまな非デスマス形が、どのような分類基準により、上記の三種に分類できるかを考察する。その際の着眼点は、発話における話し手の「情意的態度」と「聞き手目当て性」の二点である。「情意的態度」については、IFの「聞き手と親しい関係、心理的に近い関係であることが指標される」ことと、独話的発話の「話者間の心理的距離を短縮させる」ことは同様の機能であり、この機能がないIPとは対称的である。「聞き手目当て性」については、IPの「聞き手に対する意識が希薄」であることと、独話的発話の「聞き手不在であるかのように」発話されることは同様の機能であり、IFの「聞き手に対して強く意識が向けられて」いるこ

とと対称的である。以上を図示すると表3のようになる。

表3 情意的態度・聞き手目当て性から見た非デスマス形のタイプによる相違

	強	弱
情意的態度	IF・独話的発話	IP
聞き手目当て性	IF	IP・独話的発話

非デスマス形の三つのタイプは、「情意的態度」と「聞き手目当て性」、それぞれの度合いを強弱で判断することにより分類できることになる。本研究ではこの仮説を検証するとともに、具体的な分類方法の検討を行う。分類方法を検討する上で、裸の非デスマス形は観点の一つとなるが、その定義についてメイナード(1991, 1993)では、終助詞や補助動詞、ノダ構文等のモダリティ要素が共起しておらず、文が繫辞の「だ」、あるいは用言の終止形で言い切られた非デスマス形発話を指すとされている。これに加え本研究では、「だ」も情意的態度を表す要素となり得るためモダリティ要素と見なし、終助詞と合わせて文末詞と称する。また、用言の終止形だけでなく名詞で言い切られた場合も、裸の非デスマス形に含むものとする。なお、本稿では、非デスマス形発話と共起することで情意的態度を表す要素を「モダリティ要素」とし、affect keyを含むものとする。

4.2 分析方法

まず、非デスマス形会話・デスマス形会話、それぞれにおける発話文を、「デスマス形」「非デスマス形」「中途終了」に分類した。次に、すべての非デスマス形発話に対し、IF・IP・独話的発話の分類を試みたところ、「裸の非デスマス形」「文末詞」「文末の上昇音調（以下、上昇音調）」に加え、「補助動詞」「疑問文における疑問詞（以下、疑問詞）」も、モダリティ要素としてタイプの区別に関与していると考えられた。他のモダリティ要素として、Cook(2002)では、音の引き伸ばし、音の縮約、倒置が挙げられており、さらにCookが参照しているOchs(1988)では、テンス、アスペクト、ボイス、語順、直示（指示詞、代名詞、等）、数量詞といったものも挙げられている。本研究では、特にタイプの区別に関わっていると思われる「裸の非デスマス形」「文末詞」「上昇音調」「補助動詞」「疑問詞」の観点から分析を行うが、その他のモダリティ要素についても適宜考察に加える。

次に、全体的な傾向を見るために、上記五種がそれぞれ非デスマス形発話にどの程度用いられているかを調べた。一つの発話文に文末詞および補助動詞が複数用いられていた場合、それらすべてを区別して集計するのは煩雑となるため、タイプの区別に最も強く関与するであろう、末尾にある要素のみを集計対象とした。例えば、

「よね／だね／けどね／かもしれないね」等はすべて「ね」として、「のだ」は「だ」として集計した。特に非デスマス形会話には、ときおり地方方言が見られたが、直接対応する標準語形があるものは変換して集計した。例えば「そうなんや」「そうなんじゃ」の「や」「じゃ」は「だ」とした。直接対応する語形がない場合は、分析の対象外とした。また、一発話文に複数の種類のモダリティ要素が共起した場合は、すべてを集計した。例えば、「夏休みどこか行く？」の場合、疑問詞と上昇音調の使用をそれぞれ1回として数えた。

上昇音調については音声データが必要となるが、『BT SJによる日本語話し言葉コーパス』から用いた4組の会話データは、音声データを有しておらず、文字化データでも、疑問符“?”は疑問文の機能を果たしている文に付されており、上昇音調かどうか判別できない。そのため、筆者が採集したデータの非デスマス形発話のみ（2組、計約100分、発話文数1454）を集計対象とした。音声のないデータについては、疑問符“?”が付されているものも裸の非デスマス形として集計した。

5. 結果と考察

5.1 全体の傾向

まず、デスマス形会話、非デスマス形会話における各スタイルの使用頻度を表4に示す。

表4 各スタイルの使用頻度

	デスマス形	非デスマス形	中途終了
非デスマス形会話	33(1.0%)	2585(79.0%)	655(20.0%)
デスマス形会話	3112(62.0%)	922(18.4%)	983(19.6%)

非デスマス形会話ではデスマス形の使用はほとんどなく、IFの使用に制約はかかっていると考えられる。デスマス形会話ではすべての話者が、スタイルの中でデスマス形を最も多く用いており、また、会話の途中からデスマス形使用が減少する話者も見られなかったことから、会話を通してIFの使用に制約がかかっていると考えられる。

続いて、非デスマス形に占める裸の非デスマス形、およびモダリティ要素を含む非デスマス形の使用回数を表5に示す。

表5 裸の非デスマス形及びモダリティ要素を含む非デスマス形の使用頻度

	非デスマス形会話(n=2585)	デスマス形会話(n=922)
裸の非デスマス形	759(29.4%)	511(55.4%)
モダリティ要素を含む非デスマス形	1826(70.6%)	411(44.6%)

非デスマス形会話における裸の非デスマス形には、上昇音調が共起しているであろう発話も含まれているため、正確な実態を反映したものではないがそれでも裸の非デスマス形は、デスマス形会話のほうが多く用いられている。メイナード（1993）では、20組の友人間による日常会話（計60分）で用いられた裸の非デスマス形は、すべての非デスマス形発話の約12%だったことが報告されている。本研究と同様に、名詞で終えられた発話も裸の非デスマス形に加えた場合、その使用率は約28%となり、29.4%であった本研究での裸の非デスマス形に近い使用率となる。このことから、非デスマス形主体の雑談一般における、非デスマス形に占める裸の非デスマス形の割合は、およそ3割程度であると言える。

一方、デスマス形会話では、非デスマス形発話の半数強を裸の非デスマス形が占めており、モダリティ要素の使用に制約がかかっていることがうかがえる。

5.2 裸の非デスマス形と各モダリティ要素の特徴

Cook（2002）では、IP には主に「裸の非デスマス形」が用いられ、非デスマス形発話による情意的態度は、主に affect key とされるモダリティ要素との共起によるという。だが、これは典型的な特徴であり、非デスマス形発話の分類を決定づけるわけではない。そのため、どのような特徴をもった非デスマス形発話が、どのような場合に、IF・IP・独話的発話のどれになるのかを調べる必要がある。以下では、「裸の非デスマス形」「補助動詞」「文末詞」「疑問詞」「上昇音調」という特徴に基づき、非デスマス形発話の分類について、事例を挙げつつ論じる。

5.2.1 裸の非デスマス形

裸の非デスマス形は、先述したように制度的会話の特定の文脈においては IF にもなり得る（Cook, 2002, 2008a）。では、制度的文脈に依存しない雑談において、どのような場合に裸の非デスマス形は IP にならないのだろうか。デスマス形会話と非デスマス形会話を比較検討した結果、裸の非デスマス形は、以下の三つの発話環境において、IF、または独話的発話として認められた。

(1) 質問に対する答えとして用いられたとき

Maynard（1991）では、裸の非デスマス形が用いられやすい発話環境の一つとして、相手と親しい関係であること、社会的に近い関係であることを表すときが挙げられている。例(5)の02行目のような発話である。

例(5)【メイナード（1993: 123）】

- 01 A: ツイストのたかしちゃん知ってる？
02→B: 知ってる。

メイナード（1993）では、例(5)のような、相手による質問の述部を繰り返して答える例、あるいは相手が質

問の述部まで言い切らない内に、述部を先取りするかのように応答を行う例が取り上げられている。本研究の非デスマス形会話において、裸の非デスマス形は、例(6)、(7)のように繰り返しや先取りでない場合にも、質問に対する応答に用いられていた。

例(6)【N-06】

- 01 NF09: 屋台とか行った？
02→NF08: 屋台は行かない。

例(7)【N-03】

- 01 NM01: 院どこに行くの？結局は。
02→NM02: わかんない。

非デスマス形会話において、例(5)(6)(7)のような、疑問文の形をとった情報要求に答える際の、裸の非デスマス形の使用は頻繁に見られたが、デスマス形会話では二例見られたのみであった。質問に対する応答はモダリティ要素が共起していなくても、自動的に聞き手目当ての発話となり、失礼になりやすいためと考えられる。このような場合の非デスマス形は、聞き手と近しい関係であることが指標される IF であると言えよう。

例(8)は、デスマス形会話で見られた二例の内の一例である。02行目で F09 が F10 のあだ名を尋ねている。

例(8)【P-09】

- 01 F10: 入学当時の引きずってます。
02 F09: なんて呼ばれてますか？
03→F10: 《あだ名》。
04 F09: え、かわいい。

03行目で F10 は、自分のあだ名を名詞一語で答えている。このあだ名は2音節だが、どちらの音節も同じ母音であり、聞き取りにくいせいか、F10 は音節を区切ってはっきりと発音している。デスマス形会話において、質問への答えであっても、このような場合には非デスマス形が用いられやすいとすれば、聞き手の知らない固有名詞等を答える際には、聞き手への情意的態度よりも、情報内容に焦点化される IP として理解されやすいと考えられる。

(2) 率直な感情を表出するとき

裸の非デスマス形が IP となるかどうかの判断には、発話内容も考慮する必要がある。Geyer（2008）は、非デスマス形の理解に関わる要素として、Cook（2002）の言う affect key 等のモダリティ要素、連鎖組織に加え、どのような行為であることを表す内容の発話かという点を挙げている。デスマス形会話においてもよく見られたのは、例(9)のような場合である。

例(9) 【P-09】

- 01 F07: 大学生ですか？
 02 F04: あ、院生[です。
 03 F07: [あ院生、[この。
 04 F04: [はい。
 05 はい。
 06→F07: あー、羨ましい。
 07 F04: え hhh

F04が大学院生であることを知り、社会人であるF07は「羨ましい」(06行目)と、自身の率直な感情を表出している。このような発話環境で非デスマス形へのシフトが起こりやすいことは、先行研究でも多く報告されている(生田・井出, 1983; 三牧, 1993, 2000; Okamoto, 1999)。この発話が率直な感情表出であると言えるのは、裸の非デスマス形が即時的な反応であることを指標すること(Maynard, 1991)に加え、「羨ましい」という話し手の感情を表す語が用いられていることによる。デスマス形会話での同様の例は、多くの場合、「すごい」「怖い」といった形容詞一語での短い発話が用いられていた。このような、話し手が率直な感情を表出している発話は、聞き手目当てとは理解されないため、裸の非デスマス形であっても、IPではなく独話的発話と認定できる。

(3) 自己訂正を行うとき

自己訂正を行う場合の裸の非デスマス形も、独話的発話と解釈できる。例(10)では、F06が会話収録に参加した経緯を話し(01-04行目)、M03がその内容を確認しようとした際に自己訂正を行っている(05-06行目)。

例(10) 【P-06】

- 01 F06: えっと、母が、(はい)えっと、《調査者》さん
 02 (はい)、あの、母が大学で教えてて《調査者》
 03 さんを、でその(はい)、紹介みたいな、感じ、
 04 [で…
 05 M03: [あ《調査者》さんの、お母さん[が、[あーちゃ
 06 ちゃう hh。
 07 F06: [は [あーやや
 08 -そうです hh。
 09 M03: お母さんが(はい)、《調査者》さんに教えてて、

M03は、自身の発話途中で「違う違う」を縮約させた「ちゃちゃう」(05-06行目)と発話することで、自身の発話内容が誤っていたことを表示している。この発話は自身に宛てられたものであり、また、同一語句の連呼(Ochs, 1988)、音の縮約、笑いといった複数の要素によって、情意的態度が表示されている。これらの特徴から、05-06行目は独話的発話であると認定できる。

以上、裸の非デスマス形がIPにならない三つの例を見たが、この他に例(3)のように、冗談の文脈において相手の発話を繰り返すことで、情意的態度が表出される場合も挙げられる。この場合も、聞き手に特定の働きかけを行っておらず聞き手目当てではないという点で、独話的発話に分類されよう。

5.2.2 補助動詞

Maynard (1991)、メイナード (1991, 1993) において補助動詞は、非デスマス形に用いられることで話し手の情意的態度を表すものとして扱われている。だが、補助動詞にはさまざまな種類があるため、データに基づき個別に検証を行う必要がある。表6に非デスマス形会話、デスマス形会話それぞれにおいて、非デスマス形発話に用いられていた補助動詞の種類と使用回数を示す。表中の括弧は使用者数が1名のみだったことを指す。

表6 補助動詞の使用回数

使用された補助動詞	非デスマス形会話	デスマス形会話
じゃない	73	2
でしょう	24	0
らしい(伝聞)	14	(1)
だろう	11	7
そう(様態)	3	11
よう(意向)	(5)	0
たい	(4)	2
みたい	3	(1)
はず	(2)	0
ないといけない	(1)	2
てくれ	(1)	0
かもしれない	0	6
てしまう	0	5
まま	0	(1)
てほしい	0	(1)
すぎる	0	(1)

補助動詞はその多くの種類が少ないサンプル数ではあるが、それぞれの補助動詞が用いられた非デスマス形が、どのようにIF・IP・独話的発話に分類可能かを論じる。

(1) 「じゃない」

「じゃない」は「さっき言ったじゃない。」のようなときの「じゃない」である。非デスマス形会話の中でも特に友人間会話において、縮約形である「じゃん／やん」の形で頻繁に用いられていたが、デスマス形会話では2例見られたのみだった。「じゃない」は、聞き手が当然知っているはずの知識を活性化させるものであり(庵他, 2001)、聞き手に宛てられるIFと言える(例(11))。

例(11) 【N-06】

- 01 NF09: そこがなんか、みんなはやっぱ春休みとか
02→ でさ、家探しに[行ったりさ、するじゃん。
03 NF08: [あ、探した、んー。

(2) 「でしょう」

「でしょう」も「じゃない」と同様に、聞き手の知識を活性化させる確認要求である(庵他, 2001)⁷。形態的には「だろう」と対立するデスマス形であるが、丁寧さを欠いた発話になりやすいため、スタイルシフトの研究では非デスマス形に分類されることもある(Cook, 2008b 等)。非デスマス形会話では24例の使用が見られ、縮約形の「でしょ」の形でよく用いられていたが(例(12))、デスマス形会話では一例も見られなかった。「でしょう」は聞き手と親しい関係、近しい関係であることを指標するIFに相当するものと考えられる。

例(12) 【N-03】

- 01 NM02: 俺なにげにねー、らんぶ亭とか好きなんだよ
02 ね。
03→NM01: あそこ高いでしょ。

(3) 「らしい」

伝聞の「らしい」の使用は、デスマス形会話では1例のみだったが(例(13))、非デスマス形会話では6名に14例見られた。デスマス形会話では、デスマス形の「らしいです」を用いていた者は7名いたことから、「らしい」の使用自体に乏しかったわけではない。「らしい」は、伝聞として聞き手に新情報を伝達する発話であるため、聞き手に宛てられるIFであると言える。

例(13) 【P-10】

- 01 F12: 《店名》は行ったことありますか？
02→F11: 《店名》ないんですけど(はい)すごい高いらしい。
03 しい。
04 F12: あたし、あそこのバイト店員なんですよ。

(4) 「だろう」

デスマス形会話で用いられていた「だろう」は、「でしょう」のように聞き手の知識を活性化させるものではなく、すべて疑問詞と共起し、話し手が回想を行っていることや思考を巡らせていることを表すものであった(例(14))。こういった、自身に宛てられた情意的態度を表す発話は、典型的な独話的発話と言えよう。

例(14) 【P-09】

- 01→F10: あたしいつ以来行っていないんだろ。

(5) 「そう」

様態の「そう」は、デスマス形会話で7名に見られた。すべての発話が例(15)のように、率直な感情の表出であったため、独話的発話と解釈できた。

例(15) 【P-10】

- 01 F12: 足のバレーみたいな感じの(あー)、スポーツあるんです[けど、みんなする。
03→F11: [おもしろそう。
04 え、すごい器用ですね、足で、

(6) その他

以下、使用が少なかったその他の補助動詞について述べる。「てしまう」はデスマス形会話のみで見られ、すべて縮約形の「ちゃう」で用いられていた。すべて積極的に聞き手に働きかける発話ではないことから、独話的発話と解釈された。「かもしれない」「ないといけない」「みたい」「まま」は、自身の客観的な考えをそのまま投げ出したもので、情報内容に焦点化されるIPになりやすい傾向が認められた。「たい」「てほしい」は自身の欲求という情意的態度を表していることから、「すぎる」は「すごすぎる」という率直な感情表出に用いられていたことから、いずれも独話的発話と解釈された。

以上、補助動詞の共起した非デスマス形の分類について論じた。本研究のデータでは事例数が少なく、非デスマス形の各タイプと補助動詞の関連については、傾向を示すにとどまる。今後、多くの事例にあたる必要があるものの、情意的態度が表示されているかどうか、聞き手目当てかどうかには曖昧なものも含まれるため、一律の判断基準を設けることは難しい。

5.2.3 文末詞

文末詞の付加された非デスマス形発話について論じる。非デスマス形発話に占める各文末詞の使用率を図1に示す。文末詞の内、一人の話者にしか用いられなかったものはサンプルとして検討が難しいため、図に含めていない。

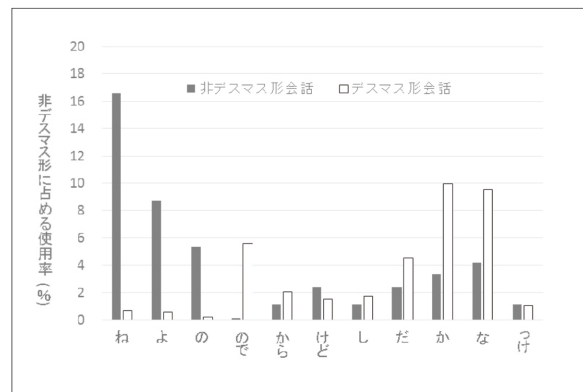


図1 非デスマス形発話に占める各文末詞の使用率

デスマス形会話と非デスマス形会話との間で、非デスマス形発話への文末詞の使用傾向には大きな違いのあることがわかる。以下、各文末詞が IF・IP・独話的発話の区別にどう関わっているのかを考察する。

(1) 「ね／よ／の」

「ね／よ／の」が、非デスマス形会話では多用されているのに対し、デスマス形会話では明らかに使用が控えられている。大学生同士によるデスマス形主体の初対面会話をデータに用いた伊集院（2004）でも、「ね／よ」が付加された非デスマス形はほとんど見られなかったことから、「ね／よ／の」で終えられる非デスマス形は基本的に、聞き手に対する情意的態度を表示する IF になると言える。これらの文末詞はデスマス形会話でもわずかに使用が見られたものの、すべて例(16)、(17)のように、聞き手目当て性の弱い発話においてであった。

例(16) 【P-11】

- 01 F14: オーナーのことどうだったっていうの聞いた
02 らなんか、すごい古株のバイトの人がー、や、
03 正直だめだったと思いますとか言い出して、
04→ ゆえよじゃあ。
05→F13: そう思ったら言えよ。
06→ 「最初から言えよ。
07 F14: 「あたしたちには言えないんだからゆってくれ
08 よって…

例(17) 【P-01】

- 01 F01: あ、でもなんか、その瞬間でなかなかねー、
02 なる- 多分立ち会えることなんて滅多にない
03 .ですよ。
04 F02: そうですねー。
05 F01: んー、自分、
06→F02: 自分のときは自分が必死やしね。
07 F01: そうそうそう。

例(16)は、形態的特徴だけをみれば典型的な IF であるが、04行目は回想における当時の心情を表出したもの、05、06行目は相手の心情を代弁したものであり、明らかに「今・ここ」の聞き手に対して宛てられたものではない。よって、定義の上で例(16)は独話的発話に該当する。例(17)は、接続助詞の「し」を用い、補足的な内容の発話を行うことで、聞き手目当て性が弱められている。だが、聞き手に宛てられていないとまでは言えないことから、IF と独話的発話の中間的な発話と位置づけられる。

(2) 「ので」

「ので」は、デスマス形会話では多用されていたが、非デスマス形会話では1回の使用が見られたのみであった。主観的な「から」と比べ、「ので」は客観的である

ことから丁寧さをもつとされる（国広，1992）。非デスマス形であっても「ので」で終わる発話は、丁寧さや聞き手への敬意が指標されるのであろう。この特徴は IF・IP・独話的発話、いずれにも該当せず、機能的にはむしろデスマス形に近いものと考えられる。

(3) 「から／けど／し」

「から／けど／し」は、デスマス形会話でそれぞれ、10名、5名、6名に用いられており、非デスマス形会話との間で使用率に大きな差も生じていない。デスマス形会話でも制約なく用いられていることから、これらは聞き手目当て性を減じさせるものであると考えられる。文末に用いることで、聞き手への非難や不満といった情意的態度が強く表される場合もあるが（例「そこ私の席なんだけど」）、本研究のデータにこういった用法はなく、発話を後景化させる役割が大きいものと感じられた。そのため、「から／けど／し」で終えられる非デスマス形は、主に発話の情意的態度よりも情報内容に焦点化する IP になりやすいものと判断した。なお、接続助詞の「が」で終えられる非デスマス形は、本研究のデータには観察されなかった。

(4) 「だ／か／な／っけ」

「だ／か／な／っけ」は affect key であるため、これらが付加された発話は情意的態度を表出する発話となりやすいが、「ね／よ／の」と異なるのは、聞き手に宛てられない発話になりやすいという点である。特にデスマス形会話では、「そうなんだ」「そっか」「いいなー」「なんて言うのかな」といった独話的発話として用いられていた。だが、非デスマス形会話では、例(18)のように独話的発話ではない用い方もなされていた。

例(18) 【N-01】

- 01→NF02: でも、私、DVD 2つ買ったんだ。
02 NF01: あ、何と何？

この場合、情報提供の発話として聞き手に宛てられており、IF と判断できる。非デスマス形会話では他に、確認要求・明確化要求の発話も見られた。

(5) その他

その他の文末詞として、非デスマス形会話では、「さ／もの（もん）／わけ／って／わ」が、デスマス形会話では「わ／ぞ」が観察された。「わ／ぞ」は、非対話的、独話的な用法がある（日本語記述文法研究会，2003）が、デスマス形会話ではすべて独話的発話と認められた。

5.2.4 疑問詞

疑問詞の使用回数および非デスマス形発話における使用率は、非デスマス形会話が130回で5.0%、デスマス形会話が44回で4.7%と、使用率にはほとんど差がなかった。だが、デスマス形会話での使用の大半は、例(19)の

ように、「かな」「っけ」「だろう」といった要素と共起することで、回想したり、思考を巡らせたりしているときであった。

例(19) 【P-06】

- 01→M03: でなんか俺もなんか、なんやったかな。
 02 特進コースやって(はい), もうそれやから全然
 03 余裕で行けたんですけど, なんか, なんでしょ
 04 うね。

非デスマス形は疑問詞が付加された場合、情報要求や確認要求であれば IF、自問の発話であれば独話的発話となる傾向が見られた。

5.2.5 上昇音調

発話末の上昇音調の使用回数、及び非デスマス形における使用率は、非デスマス形会話が249回、17.1%、デスマス形会話が18回、2.1%であった。音声データを有する会話が非デスマス形会話は2組のみだったが、デスマス形会話との間で、使用頻度に差があることは明らかである。デスマス形会話で用いられていた18例の上昇音調の内、複数の話者に用いられていたのは、以下に挙げる四つの発話環境においてであった。

(1) 驚きや率直な感情を表出するとき

話者の驚きや率直な感情を表出するときには非デスマス形へのシフトが起こりやすい(生田・井出, 1983; Okamoto, 1999; 陳, 2003 等)。その際、非デスマス形発話は聞き手目当てにならず、且つ情意的態度を表出するため、独話的発話としての性質をもちやすい。だが、上昇音調で発話された場合は異なるようである。例(20)では、F13が、初対面である F14が同郷の者であることを知り、驚いている。

例(20) 【P-11】

- 01 F13: 佐賀でも佐賀出身(はい)じゃないです,
 02 [よね。
 03 F14: [あ, いえいえやっぱり佐賀出身ですよ。
 04→F13: あ, ほんと? 【声高ぶる】
 05 F14: はいはい hh, ほんとですほんとです,

例の「ほんと?」(04行目)は、相手に関する内容の発話が上昇音調でなされることにより、聞き手に宛てられた発話となっており、05行目で F14もこれに答えている。この例から、率直な感情を表出する発話でも、上昇音調の共起により、聞き手に対する情報要求や確認要求と聞かれるようであれば IF となることがわかる。

(2) 自身の用いた語句が不確かであることを表すとき

例(21)は、自身の発話の中で用いた語句が、不確かなものであることを表す際に用いられた上昇音調である。

例(21) 【P-10】

- 01 F12: 取れないんですか, チケットって。
 02 F11: すっごいたか- あ, でも, アイスホッケーとか
 03 もすごい人気で高いん(はい)ですけどあの,
 04 なんて, なんて言うんですかね。
 05→ こ- ケーリング?
 06 F12: あー, ありますね。

あるスポーツ競技の名前を思い出そうとする中での F11による「ケーリング?」(05行目)は、いわゆる半疑問形であり、自問であると同時に、聞き手の助けや承認を求めているものとしても聞くことができる。こういった場合、IF と独話的発話のいずれとも判断しがたい。IF では失礼になりかねず、独話的発話では相手の反応が引き出せないおそれがあるため、あえて曖昧に聞かれる中間的なものとして発話されていると思われる。

(3) 相手の発話を繰り返すとき

文末詞と同じく上昇音調も、例(22)のように相手の発話の一部を繰り返すときに見られた。

例(22) 【P-06】

- 01 M03: あでも俺も, 22年間大阪ですよ。
 02→M02: 大阪?
 03 M03: もうずっと。

M02が、M03による発話の一部である「大阪」を、上昇音調により発話している(02行目)。これは直前の相手発話の一部を繰り返したものであり、IF である質問とも、独話的発話である自問ともとれる。この場合も例(21)と同様に中間的な発話と解釈でき、その曖昧さゆえに、M03は02行目に対する直接の反応を示さないことも可能となっているものと思われる。また、上昇音調が共起した繰り返しは、デスマス形会話では他に1例見られたのみだったが、同じく名詞一語の発話だった。非デスマス形会話では動詞の場合にも用いられており、非デスマス形発話の聞き手目当て性には、品詞の種類も関わっていることが示唆される。

(4) 質問者が質問の答えになり得る候補を先取りのように挙げるとき

上昇音調には、例(23)のように、話し手が質問を行った直後、聞き手の答えを先取りするかのように、答えの候補を提示するときに用いられるパターンも観察された。

例(23) 【P-10】

- 01 F12: え帰省するとき(はい)なんで帰ります?
 02→ バス?
 03 F11: いや, 普通,
 04→F12: [新幹線?]

05 F11: あーでも、バスー、だったり新幹線だたり。

02, 04行目は、01行目の質問への補足的な発話として立て続けになされることで、聞き手目当て性が弱められている。とはいえ、上昇音調が共起することで、明示的に情報要求を行う発話となっているため、IF と解釈するのが妥当に思われる。

6. まとめ

以上、非デスマス形発話について、「情意的態度」と「聞き手目当て性」の観点から、「裸の非デスマス形」「補助動詞」「文末詞」「疑問詞」「上昇音調」という形態的・音声的特徴に基づき、IF・IP・独話的発話への分類を試みた。

その結果、非デスマス形発話を IF・IP・独話的発話に分類することは、概ね妥当であることが認められた。どのタイプにも当てはまらない発話も見られたが、それはタイプ間の中間的な発話であり、三種に分類することの妥当性を損ねるものではない。

IF・IP・独話的発話の分類基準については、結果を表7にまとめる。ここで提示する分類基準は目安であり、常にこのように分類されるという規則ではない。また、文末詞に「ので」が含まれていないのは、「ので」で終わる発話が、形態上は非デスマス形であっても、機能的にはデスマス形相当と考えられたためである。

分類が難しい中間的な発話も見られたことについて、本研究のデータでは、特に補助動詞や上昇音調のサンプルに乏しく、データを追加してさらに分類基準の妥当性を検証していく必要がある。しかし、それは観察されなかった他のパターンを探るためであり、IF・IP・独話的発話のどれに該当するかという一律の分類基準を求めるためではない。聞き手に宛てられているのかどうか、話者の情意的態度が表示されているのかどうかといったことは、話者間でも常にはっきりと判断できるものではないからである。そのため、一律の分類基準を求めようとすれば、話者自身が行っていることの記述から乖離してしまいかねない。むしろ、話者は非デスマス形発話を基本的には三種に使い分けつつも、どのような場合に、どのような方法により、分類の難しい曖昧な非デスマス形発話を用いているのか、それによりどのような機能が果たされているのかという点が、今後、一考に値する課題であろう。

表7 IF・IP・独話的発話の分類基準

	IF	IP	独話的発話
裸の非デスマス形	・質問に対する答えとして用いられたとき（ただし、発話が聞き手にとっての新情報となる固有名詞であったときはIP)	・モダリティ要素等により話し手の情意的態度が表示されておらず、聞き手目当ての発話ではないとき	・率直な感情を表出するとき ・自己訂正を行うとき ・冗談の文脈で相手の発話を繰り返すとき
補助動詞	「じゃない」「でしょう」「らしい」「だろう」	「てしまう」「かもしれない」「ないといけない」「みたい」「まま」	「だろう」「そう」「たい」「てほしい」「すぎる」
文末詞	「ね」「よ」「の」「だ」「か」「な」「っけ」（ただし、「今・ここ」の聞き手に宛てられているとき）	「から」「けど」「し」（ただし、情報を後景化する発話として用いられたとき）	「だ」「か」「な」「っけ」「わ」「ぞ」
疑問詞	情報要求や確認要求を行うとき		「かな」「っけ」等と共起し、回想したり、思考を巡らせたりしているとき
上昇音調	情報要求や確認要求を行うとき		自問を行うとき

7. 結論

多くのスタイル研究において非デスマス形は、その文末形式に基づいた一つのカテゴリーとして扱われがちである。しかし、同じ形式であっても異なる機能を果たす発話が混在している以上、非デスマス形発話の機能を考慮した分類方法を検討する必要がある。

本研究では、Cook（2002）による非デスマス形発話のIF・IPへの分類には独話的発話が該当しないこと、ならびにこの三種は話者の「情意的態度」と「聞き手目当て性」の度合いによって区別できることを指摘し、デスマス形主体の雑談と、非デスマス形主体の雑談をデータに用い、その妥当性を確認した。また、IF・IP・独話的発話の分類方法として主に、「裸の非デスマス形」「文末詞」「上昇音調」「補助動詞」「疑問詞」が、どう用いられているかを見ることで検討し、分類の目安を作成した。この分類方法を精緻化していくためには、より多様なデータに基づき検討していく必要がある。

註

1. 言語の「スタイル」には本来さまざまなものが含まれ、また、言語形式自体を指すものではないが、本研究では、文の「デスマス形／非デスマス形」という形式を指すものとする。また、「デスマス形／非デスマス形」は、「丁寧形／普通形」「親体／常体」

- 「デスマス体／ダ・デアル体」とも呼ばれるが、基本的にこれらに含まれる範囲と異なるものではない。
2. 本稿で引用している Cook (2002, 2008a) の会話例は、原文ではローマ字表記である。
 3. 会話例中の二重斜線 “//” は、相手との発話の重複が開始された地点であることを、“()” は聞き取りが不明瞭な箇所であることを表す。また、行番号と矢印、発話の下線は筆者による。
 4. 「制度的会話」とは、会議や授業、病院での診察等、会話の目的や話者間の関係、発話内容といった、その場でのふるまい方についての知識が、ある程度当該社会で共有されているタイプの会話を指す。しばしば「日常会話（雑談）」と対置される概念である。
 5. コーパス番号及び会話コード欄の括弧内は、宇佐美 (2007a) での名称である。
 6. この場合の「て／で」で終了している発話は言い切られていないことを表す発話であり、「ほら、これ見て」「今日休講だって」のような言い切られた発話の場合は非デスマス形となる。
 7. 「でしょう」には推量と確認要求という二つの用法があるが、庵 (2009) によれば、実際の使用で見られるのは多くの場合、確認要求である。本研究の非デスマス形会話に見られた「でしょう」も、例(12)のようにすべて確認要求であった。

会話例に用いた記号凡例

本稿の会話例に用いている記号は、会話分析で通常用いられるジェファソン・システムを基にしたものだが、可読性を重視し、やや簡略化した。以下に記号の意味を記す。

発話	非デスマス形であることを判断した述部
(発話)	発話進行中の相手による相づち
…	言いよどみ
[隣接する発話との重複が開始した地点
-	直前の音の声門閉鎖音による中断
。	発話の言い切り
,	直前の部分が、発話が継続することが予測できる音声的特徴で発せられている
?	直前の部分が上昇音調
h	笑い、または隣接する部分が笑いながら発話されている
#	聞き取り不可
《 》	プライバシー保護による伏せ字

出典

宇佐美まゆみ監修 (2007a) 『BTSJ による日本語話し言葉コーパス 1 (初対面・友人、雑談・討論・誘い)』

「談話研究と日本語教育の有機的統合のための基礎的研究とマルチメディア教材の試作」平成15-18年度科学研究費補助金基盤研究 B (2) (課題番号15320064) 研究成果

参考文献

- Cook, H. M. (2002) The social meanings of the Japanese plain form. In Akatsuka, N. & Strauss, S. (Eds.), *Japanese/Korean Linguistics* (Vol. 10), 150-163. Stanford, CA: CSLI Publications.
- Cook, H. M. (2008a) Construction of speech styles: The case of the Japanese naked plain form. In Mori, J., & Ohta, A. S. (Eds.), *Japanese Applied Linguistics: Discourse and social perspectives*, 60-108. London: Continuum.
- Cook, H. M. (2008b) *Socializing Identities through Speech Style: Learners of Japanese as a foreign language*. Clevedon, UK: Multilingual Matters.
- Geyer, N. (2008) Interpersonal functions of style shift. In Kimberly, J. and Ono, T. (Eds.), *Style Shifting in Japanese*, 39-69. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Maynard, S. K. (1991) Pragmatics of discourse modality: A case of *da* and *desu/masu* forms in Japanese. *Journal of Pragmatics*, 15, 551-582.
- Megumi, M. (2002) The switching between *desu/masu* form and plain form: From the perspective of turn construction. In Akatsuka, N. & Strauss, S. (Eds.), *Japanese/Korean Linguistics* (Vol. 10), 206-219. Stanford, CA: CSLI Publications.
- Ochs, E. (1988) *Culture and Language Development: Language Acquisition and Language Socialization in a Samoan Village*, Cambridge University Press.
- Okamoto, S. (1999) Situated politeness: Manipulating honorific and non-honorific expressions in Japanese conversations. *Pragmatics*, 9(1), 51-74.
- 庵功雄 (2009) 「推量の「でしょう」に関する一考察—日本語教育文法の視点から—」『日本語教育』142, 58-68.
- 庵功雄・高梨信乃・中西久美子・山田敏弘 (2001) 白川博之 (監修) 『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 生田少子・井出祥子 (1983) 「社会言語学における談話研究」『言語』12, 77-84.
- 伊集院郁子 (2004) 「母語話者による場面に応じたスピーチスタイルの使い分け—母語場面と接触場面の相違—」『社会言語科学』6 (2), 12-26.
- 宇佐美まゆみ (2007b) 「改訂版：基本的な文字化の原則

- (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ) 2007年3月31日改訂版『談話研究と日本語教育の有機的統合のための基礎的研究とマルチメディア教材の試作』平成15-18年度科学研究費補助金 基盤研究B(2) (研究代表者 宇佐美まゆみ) 研究成果報告書
- 岡崎渉 (2017) 「スタイルシフトにおける非デスマス形はいかに情意を表すか」『表現研究』105, 21-30.
- 国広哲弥 (1992) 「『のだ』から『のに』・『ので』へ—『の』の共通性—」カッケンブッシュ寛子・尾崎明人・鹿島央・藤原雅憲・初山洋介 (編) 『日本語研究と日本語教育』17-34.
- 白川博之 (2009) 『「言いさし文」の研究』くろしお出版
- 陳文敏 (2003) 「同年代の初対面同士による会話に見られる「ダ体発話」へのシフト」『日本語科学』14, 7-27.
- 仁田義雄 (1991) 「言表態度の要素としての<丁寧さ>」『日本語学』10(2), 65-75.
- 日本語記述文法研究会 (2003) 『現代日本語文法4 モダリティ』くろしお出版
- 日本語記述文法研究会 (2009) 『現代日本語文法7 談話・待遇表現』くろしお出版
- 廣瀬幸生・長谷川葉子 (2010) 『日本語から見た日本人—主体性の言語学—』開拓社
- 三牧陽子 (1993) 「談話の展開標識としての待遇レベル・シフト」『大阪教育大学紀要 I 人文科学』42(1), 39-51.
- 三牧陽子 (2000) 「丁寧体基調の談話にみる独話的発話・直接引用・心情の直接表出—「働きかけ方式」のポライトネス・ストラテジーとして—」『多文化社会と留学生交流』4, 37-53.
- メイナード, K・泉子 (1991) 「文体の意味—ダ体とデスマス体の混用について—」『言語』20(2), 75-80.
- メイナード, K・泉子 (1993) 『会話分析』くろしお出版

謝辞

関西学院大学の張承姫氏に会話データを拝借した。記して感謝する。

付記

本論文は、2016年、広島大学に受理された博士学位論文『日本語の雑談における母語話者と上級学習者によるスタイルシフトの研究—非デスマス形の指標的機能の観点から—』(甲第7068号, 未公刊)の一部に加筆・修正を行ったものである。